〔好色一代男三〕木綿布子もかりの世

今男盛二十六の春、坂田といふ所に始めて著きぬ、○中略勸進比丘尼聲を揃へて唄ひ來れり、是はと立よれば、かちん染の布子に、黑綸子の二つ割前結にして、頭は何國にても同じ風俗なり、元是はかやうの事をする身にあらねど、何時比よりをりやう猥になして、遊女同前に相手を定めず、百に二人といふこそ可笑しけれ、あれは正しく江戸滅多町にて忍び契をこめし、淸林がつれし米かみ、其時は菅笠が歩くやうに見しが、早くも其身にはなりぬと昔を語る、

〔蜘蛛の糸卷〕かくし賣女

此けころといふ名義は、此比淺草、兩國、橋町、石町邊にてころび藝者と唱へ、百疋づゝにてころびねの枕席をたるものありしゆゑ此名あり、けころの名は蹴轉ばしの義なり、此けころ切二百、泊りは客より酒食をまかなひ、夜四つより二朱なり、一軒に二三人づゝ晝夜見世を張り、衣服は縮緬を禁じ、前だれにて必半疊の上に座すなり、案ずるに、水茶や、茶汲女の姿なりつらん、此賣色大方佛店より軒を並べて、四五十軒ばかりありつらん、是おのれが目睫をいふ、けころの姿、繪にも團扇にも賣り出だしたるを、余一柄を藏す、今は珍奇なり、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕蹴ころばし、艶道通鑑に、白人呂州茶や臭や間短蹴倒夜發迄とあるけたをしなり、古老云、比丘尼すたれて出來たり、天明の末迄、下谷廣小路、御數寄屋町、提灯店、佛店、廣德寺前通、淺草堀田原、其外諸處にこれ有、これも一軒に二人三人づゝ出居れり、花費は貳百文づゝにて、いづれも容顏を撰み出したり、每月大師緣日には、未明より出居たり、江戸名所鑑、山下敝膝ひと銚子足に恨やこぼれ萩とあり、是なるべし、寛政以來これ絶てなし

〔守貞漫稿二十二娼家〕提重

此サゲヂウト云賣女ハ、何ノ比ニヤ未詳、ケコロト同時○天明比歟、江戸ノ古老ノ話ニ、往々其名ヲ

蹴ころ

提重